

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 1日現在

機関番号：64401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010年度～2011年度

課題番号：22810024

研究課題名（和文） 中央アジアの越境空間における宗教復興の新たな展開

研究課題名（英文） The New Development of Religious Revitalization in a Transborder Space in Central Asia

研究代表者

藤本 透子 (FUJIMOTO TOKO)

国立民族学博物館・先端人類科学研究部・機関研究員

研究者番号：10582653

研究成果の概要（和文）：

中央アジアでは社会主義体制の改革と終焉を経て、宗教（特にイスラーム）が社会的に重要性を増す現象が広く生じた。この現象はソ連成立以前の宗教実践の単なる復興ではなく、旧ソ連国境を越えた移動の増大とますます緊密に結びつくようになっている。本研究では、中央アジアの地域大国であるカザフスタンを中心に、近代化の過程で分断された周辺諸国のカザフ人マイノリティや中東諸国との関係に着目し、宗教の再構築過程にみられる越境性と地域性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Religious revitalization, especially revitalization of Islam, was widely observed in Central Asian societies after the change and collapse of socialist regimes. It is noteworthy that recent Islamic revitalization does not involve an exact revival of pre-Soviet religious practices, but is a phenomenon closely related to the rapid increase in border-crossing activities in recent years. This study analyses the connections based on Islam between Central Asia and the Middle East, as well as the Kazakh majority in Kazakhstan and the Kazakh minority in neighboring countries, such as Mongolia and China. The results of the study reveal that Kazakhs reinterpret local religious practices in various ways within the context of Islam, and try to assert the legitimacy of their beliefs in the Islamic world in the post-socialist, globalized era.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	790,000	237,000	1,027,000
2011年度	850,000	255,000	1,105,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,640,000	492,000	2,132,000

研究分野：文化人類学、中央アジア地域研究

科研費の分科・細目：人文学・地域研究

キーワード：ポスト社会主義、イスラーム、宗教復興、越境、儀礼、文化人類学、中央アジア

1. 研究開始当初の背景

旧ソ連から独立した中央アジア諸国では、反宗教政策をとっていた社会主義体制が放棄されたことにとともに、1990年代に宗教が公的領域に現れるようになった。さらに2000年代に入った頃から、宗教が再構築されていく過程は、旧ソ連国境を越えた移動の増大の影響を強く受けるようになった。中央アジアの宗教動態は、グローバル化が進展し多文化状況にある現代世界を読み解く重要なカギだが、越境と流動化が進む現代社会でなぜ他ならぬ宗教が復興傾向を強めているのかは、以下に述べるように未だ十分に解明されていない課題である。

(1) 中央アジア地域研究における文化人類学の重要性

中央アジアの人類学研究は、日本では非常に研究が立ち遅れてきた。社会主義体制下で欧米や日本からのアクセスが困難であった結果、中央アジア研究は歴史学などの文献研究や政治学・経済学などのマクロ分析が主流を占めてきた。現地調査に基づく人類学研究はいまだに少数に限られており、長期調査に基づく研究の進展が急がれる。

(2) ポスト社会主義地域の民族学・人類学

中央アジアとその周辺地域を対象とする人類学研究では、ソビエト民族学の流れを引く現地の研究と欧米の人類学の理論的・方法的隔たりが大きく、両者をいかに接合するかが課題である。特に社会主義時代に研究対象とすることが困難だった宗教実践は関心を集めており、研究上の断絶を越えて両者を発展的に接合することが求められる。

(3) 宗教研究における中央アジアのイスラーム

現代の宗教動態に関する研究では世俗化論の限界が指摘され、原点への回帰としてのイスラーム復興、社会主義体制の崩壊によるエスニシティやナショナリズムの高揚などの諸要因から、宗教の再活性化が説明されてきた。これらの理論は、中央アジアに部分的に適用できるが、国境を越えた活動の拡大のなかでローカル／グローバルな宗教動態を十分に説明するものではなく、新たな分析枠組みの提示が課題とされてきた。

2. 研究の目的

以上の研究の背景を踏まえ、本研究は、中央アジアの地域社会を対象に、社会主義体制の終焉から20年を経て宗教が再構築されていく過程を、旧ソ連国境を越えた活動の増大

に着目して人類学的視点から明らかにする全体構想に基づいて行われた。具体的には、地域大国であるカザフスタンを中心に、以下の3点に着目して、地域社会に生きる人々にとってグローバル／ローカルに宗教を復興する意味を明らかにすることを目的とした。

(1) 中央アジアから展望するモダニティと宗教の歴史的動態

宗教復興を社会主義体制の崩壊によるものとして表層的に説明するのではなく、歴史的位相においてとらえるため、近代化以前からの中央アジア地域社会における宗教動態を分析する。

(2) 中央アジアのエスニシティと宗教実践

中央アジアは、テュルク系・イラン系・スラヴ系など多民族が暮らし、中央ユーラシアの遊牧民・定住民文化、イスラーム文化、ロシア・ソビエト文化、中国文化などの多層性が特徴である。エスニシティと宗教の位相を、中央アジアでとりわけ多文化性の高いカザフスタンを中心に分析する。

(3) 越境空間の拡大にともなう宗教復興のローカル／グローバルな展開

旧ソ連国境を越えて移動が盛んになった空間を越境空間ととらえ、多様な主体が相互行為によって宗教を再構築していく過程を分析することで、地域社会に生きる人々が宗教を復興する諸要因を検討する。

3. 研究の方法

文化人類学的手法にもとづく現地調査と文献調査、および歴史資料の調査を行った。2010年度のカザフスタン調査では、カザフスタン・ムスリム宗務局やイスラーム大学を訪問し、中東諸国のイスラームとの連動・断絶に関して聞き取りしたほか、中国・モンゴル・カザフスタン間のカザフ人の移動の経緯と宗教実践に関する聞き取りおよび参与観察を行った。2011年度のモンゴルのカザフ人地域に関する現地調査では、モンゴル・ムスリム協会と役場からの聞き取りと資料収集、モスクなどにおける宗教実践の観察と聞き取りを行った。これらのフィールドデータを分析するとともに、広く中央アジアに関して宗教動態と移動に関する文献調査を行った。また、宗教実践の歴史的動態を分析するため、19世紀から20世紀初頭の歴史資料集成である『トルキスタン集成』を読み込み、人類学的な現地調査から得られたデータとの比較検討を行った。

4. 研究成果

(1) モダニティと宗教の歴史的動態—複数の社会主義国家による地域社会の分断

①カザフ遊牧民の近代化とイスラーム化

中央アジア最大の民族であったカザフ遊牧民に着目し、ロシア帝国による植民地支配のもとで、イスラーム受容の深化と近代化が同時に進行していった過程を、歴史資料『トルキスタン集成』から具体的に示した。また、現代のフィールドデータとの比較検討を行った結果、宗教的儀礼である死者儀礼が、連続性・変容・断絶後の復興という複雑な動態を示しており、その要因はソビエト時代の反宗教政策のみならず社会変容によるものであることが明らかとなった。

②近代国家の成立による地域社会の分断と反宗教政策

中央アジアは、度重なる体制移行を経験し、そのたびに地域社会の分断と人々の移動が生じてきた。歴史的に、カザフ・ハン国は19世紀におけるロシア帝国と清朝の拡張によって独立を失い、20世紀にソ連、中国、モンゴルという3つの社会主義国に分断された。国によって社会主義政策の実施時期と内容に違いが見られたことが、それぞれの国家におけるカザフ社会の宗教実践に差異を生み出し、カザフスタン独立後におけるカザフ・ディアスポラの「帰還」と宗教実践に影響を与えている。

③社会主義体制下の社会変容と宗教実践

カザフスタンにおいてソビエト時代に宗教は全面的に否定されたのではなく、第二次世界大戦中から公式イスラーム体制がとられて限定的に宗教実践が許容されていた。この体制の下でモスクは主要都市に限定されていた。しかし、宗教実践はその逆に、多民族都市においては断絶する傾向がみられ、カザフ村落においては

さらに、現代のカザフ村落社会に生きる人々が、口頭伝承による近代化以前の祖先の歴史および宗教実践を、死者儀礼をとおして表象する過程を分析した。

社会主義時代

社会的・経済的基盤の変化

(2) 中央アジアのエスニシティとイスラーム—宗教のナショナリゼーションを超えて

① 独立国家の文化的基盤としての宗教

社会主義体制から移行後、宗教は新たに独

立した国家、あるいは脱社会主義化した国家の文化的な基盤として位置づけなおされた。すなわち、世俗国家を標榜しながら宗教がナショナリズムの重要な一部を成す国民国家が誕生したのである。この現象は宗教のナショナリゼーションとも呼ばれる。その一つの特徴は、宗教とエスニシティの結びつきが所与のものとして強化されている。しかしその一方で、宗教活動の自由化は国外からの様々な布教を呼び込んだ。経済格差の広がりの中で社会的弱者となった人々を取り込み、宗教とエスニシティの結びつきを切り崩している。また、国家の文化的基盤としての宗教という位置づけは、少数民族の場合は複雑な問題をはらみ、国家が前提とするエスニシティと宗教の結びつきはほころびを見せていることも明らかとなった。

② エスニシティと宗教実践

カザフスタン国内においても、社会主義の経験のされ方によって、エスニシティと宗教実践の結びつきには差異がみられる。多民族都市アルマトゥとカザフ村落を対比させつつ、子どもの誕生と成長にともなう宗教的儀礼の実践を分析した結果、前者においては儀礼を行うことが失われた民族的伝統を取り戻すことであるのに対し、後者においては社会主義時代にも行われ続けてきた伝統をさらに活性化する意味をもつ。また、イスラームが世界宗教であることは、宗教実践がエスニシティの表現形態として位置づけられることに矛盾を引き起こしていることが明らかとなった。このことは、シベリアにおけるシャマニズムの復興がエスニシティの表出となりえたこととは異なる現象である。

(3) 越境空間の拡大にともなう宗教復興のローカル／グローバルな展開

① 中東諸国との関係の構築

中央アジアの宗教動態は、社会主義体制の崩壊に続く越境活動の急速な増大と緊密に結びついている。その範囲は近隣諸国のみならず、東アジアから中東まで広がっている。中央アジア諸国では、政府によって中東諸国との関係は積極的な構築から禁止までと異なっているが、カザフスタン政府は若いカザフ人をエジプト、トルコ、パキスタンへとイスラームを学ぶために派遣した。中東諸国との関係構築について複数の国家のカザフ社会を比較検討した結果、政府機関及び民間団体による関係構築のあり方に国による相違が見られる。モンゴルでは、民間団体である

モンゴル・ムスリム協会がカザフ人マイノリティのイスラームを再活性化するために主要な役割を果たしている。一方、伝統をイスラームの教義に照らして再解釈しローカルな宗教実践の正統性を主張する現象は共通することが明らかになった。

③ ディアスポラから「帰還」したカザフ人

カザフスタン政府は中国やモンゴルから「母国」へのカザフスタンへの帰還を奨励する政策をとり、これらの帰還カザフ人は両義的な状況に直面した。彼らは周辺化されると同時にカザフスタンのカザフ人より伝統的で宗教的とみなされている。このことは、それぞれの国家における社会主義政策の展開と深く関連していることが明らかとなった。特に中国では、文化大革命の時期までは宗教実践が比較的自由であり、1980年代に宗教復興がみられた。このため中国からの「帰還」カザフ人はカザフスタンのカザフ人より「宗教的」とみなされ、1990年代にカザフスタン各地にモスクが開設されると、イマム（集団礼拝の指導者）となった。その後、カザフスタンから中東に留学した若者たちが帰国しイマムとなったのである。また、カザフスタンとモンゴルの宗教的紐帯が強化されたことも明らかとなった。国境をまたいで存在する民族集団が、宗教を再活性化することで、社会主義体制崩壊後の新たな社会空間を生み出しているのである。

③宗教復興にみられる越境性と地域性

中央アジア諸国の独立前後からの宗教動態は、変化しつつ連続性を持って行われてきた宗教実践が一部での断絶を経つつ再構築されていく過程としてとらえられる。ここでいう宗教実践の再構築とは、単に宗教として名指される領域にとどまるものではなく、グローバル化の中で急激に変化していく地域において、人々が社会のあり方を模索する複雑なプロセスである。越境が増大する状況の下で、中東はじめイスラーム世界と広く接続されたことは、世界規模のイスラーム復興を加速させたかにみえるが、実際にはローカルな信仰実践をイスラームの文脈により理解することで自分たちの宗教実践の正統性が主張されている。シャマニズムや仏教など他宗教の事例と対比させつつ、社会主義を経験した地域における宗教動態を広く分析した結果、越境性と地域性という相反する要素が宗教復興に重要な役割を担っていることが明らかとなった。

本研究は、国境を越えて展開する中央アジアの社会・文化動態を、宗教実践を中心に明らかにしたものである。その意義は、社会主義的近代化とイスラーム復興の関係性、国民国家の枠を越えて再編される地域社会の動態、グローバル化が進展する現代における宗教の再構築メカニズムの解明に寄与する点にある。

以上の研究成果は、下記の論文・著作にまとめたほか、2012年6月には文化人類学会研究大会で分科会「社会主義をへた宗教の再構築—地域社会の分断／再編と越境からのアプローチ」を代表者として組織している。また、アメリカ人類学会に、Revitalizing Religion through Border Crossings in Post-socialist Spaces: Comparative Analysis of Islam in Kazakhstan and Western Mongoliaと題する発表を申請中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

(1) 藤本透子、「宗教が再編していく地域社会」、民博通信、査読無、135:32-33、2011年。

(2) 藤本透子、「社会主義をへた宗教のゆくえ」、民博通信、査読無、132:24-25、2011年。

〔学会発表〕(計8件)

(1) 藤本透子、「ポスト社会主義の宗教動態に関する研究動向」、国立民族学博物館共同研究「内陸アジアの宗教復興—体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開」、2012年2月25日、国立民族学博物館(大阪)。

(2) 藤本透子、「社会主義をへた宗教の再構築」、国立民族学博物館共同研究「内陸アジアの宗教復興—体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開」、2012年2月4日、国立民族学博物館(大阪)。

(3) Toko Fujimoto, The Development of Islamic Revitalization in a Transborder Space: A Case Study of Kazakhstan. American Anthropological Association 110th Annual Meeting. 2011.11.20. Montreal Convention Center (Montreal).

(4) 藤本透子、「ポスト社会主義の越境空間におけるイスラームの新展開—カザフスタンを中心として」国立民族学博物館共同研究「ポスト社会主義以後の社会変容—比較民族誌的研究」、2011年7月16日、国立民族学博物館（大阪）。

(5) 藤本透子、『トルキスタン集成』とカザフの文化人類学研究—死者儀礼を中心として」、京都大学地域研究統合情報センター共同研究『トルキスタン集成』のデータベース化とその現代的活用の諸相」2011年2月2日、京都大学地域研究統合情報センター（京都）。

(6) 藤本透子、「カザフ村落社会におけるイスラーム復興と越境」、国立民族学博物館共同研究「内陸アジアの宗教復興—体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開」、2011年1月22日、国立民族学博物館（大阪）。

(7) 藤本透子、「儀礼祭と断食月のクラン朗唱—カザフスタンの映像に見る死者供養とイスラームの展開」、国立民族学博物館共同研究「映像資料を活用したイスラームの多様性に関する地域間比較研究」、2010年1月8日、国立民族学博物館（大阪）。

(8) Toko Fujimoto The Revitalization of Commemorial Rituals: Reconsidering Islamic practices in post-Soviet Kazakhstan. Central Eurasian Studies Society, 11th Annual Conference. 2010. 10. 28. Michigan State University (East Lansing).

〔図書〕（計3件）

(1) 藤本透子、風響社、『よみがえる死者儀礼—現代カザフのイスラーム復興』、2011、390頁。

(2) Toko Fujimoto. Kazakh Memorial Services in the Post-Soviet Period: A Case Study of Northern Kazakhstan Villages. In Yamada, Takako & Takashi Irimoto (eds.) *Continuity, Symbiosis, and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies*. Hokkaido University Press, 2011, pp. 117-132.

(3) 藤本透子、風響社、『カザフの子育て—草原と都市のイスラーム文化復興を生きる』（ブックレット《アジアを学ぼう》⑱）、2010、66頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤本 透子 (FUJIMOTO TOKO)

国立民族学博物館・先端人類科学研究部・
機関研究員

研究者番号：10582653